

お茶の水女大 袖井 寿子 ○ 桐丘 短大 長津 美代子
お茶の水女大 鄭 淑子 東北大 細江 容子

本研究の目的は、しつけ構造を日本と台湾で比較し、その相違点を明らかにすることである。しつけの構造は、次の六領域からとらえる。

- 1) 子とも観
- 2) しつけイデオロギー
- 3) しつけ主体
- 4) しつけ態度
 - ① しつけの一貫性
 - ・ 父母間の一貫性
 - ・ 言行の一致
 - ・ 賞罰の一貫性
- ② 干渉的な養育態度

5) しつけ方法

① きまりの有無

② 決まらぬ小遣いの有無

③ 物質的な報酬授与の

有無

④ 賞賛の有無

⑤ 叱り方

6) しつけ評価

調査票は、日本側が中心となって作成し、本研究グループの鄭(台湾からの留学生)が中国語に翻訳した。台湾での調査は、東吳大学社会学科の鄭美蓮先生の協力を得て実施した。

調査期間：1980年6月下旬

日本(東京)：区立小学校9校の6年生とそ

の母親1089組、回収率89%、有効票897組(82.4%)

台湾(台北)：公立小学校の5年生とその母親805組、回収率78.4%、有効票556組(69.1%)

両国の調査対象者の特徴は次の通りである。

1) 子どもの性別(丁：男子48%、女子52%、ト：男子49.1%、女子50.9%)

2) 子どものきょうだい数は、日本の方が少ない。

3) 両国とも核家族が多い。

4) 父親の職種を上級ホワイトカラー(専門・技術・管理)、下級ホワイトカラー(事務・販売)、ブルーカラー(運輸・生産・単純など)に分類すると、その構成比はきわめて類似している。